

第3部 各地区の特色ある活動と 公民館の役割

第8章 文化的中心地区のまちづくりと 公民館（座光寺地区）

第1節 座光寺の概要¹⁰²

座光寺地区は、飯田盆地の北西部に位置し、飯田市の北の玄関口であり、東に南アルプスを望む、天竜川西岸の河岸段丘上の傾斜地で、天竜川原から（標高およそ400m）、猪の山扇状地（標高およそ700m）まで標高差が300mの上・中・下段に分かれる段丘地である。上段は江戸時代から原野・山林の開発を進め、昭和の桑畑を経て、現在は果樹生産地帯と新興住宅地として発展してきた。中段は、古墳郡、東山道、郡衙跡と推定される恒川遺跡があり、古代南信州北部の中心地として栄えていた。1984（昭和59）年の国道153号線バイパスの開通により、沿線に商業集積地帯が形成され、中段にある元善光寺の門前町は衰退した。下段は、米作や養鯉業が盛んであったが、基盤整備に伴う新田開発によって広い田園となり、また新たな道路の開発により、商工業が増えてきている。座光寺地区では、山林が約3分の1を占めているが、周辺地域に比べると、比較的山間部が少ない地域であるという特徴がある。

座光寺の歴史は非常に古く、地域の至る所から縄文・弥生時代の土器や石器が多数出土しており、飯田市において2番目に多い77の古墳がある。また、日本最古の貨幣や銀錢も座光寺から発掘されている。座光寺という名は、江戸時代に「座光寺村」という名で成立し、1956（昭和31）年に、飯田市に合併され、現在の「座光寺」に変更した。この地域にある古い建物は、元善光寺や麻績神社などのお寺や神社、それから江戸時代から明治時代に建てられた100年以上も前の古い民家がたくさん残っており、歴史的文化財を多く持っている。また、座光寺地区は、正式にはないが、「麻績の里」ともよく呼ばれている。現在は、面積8.94㎏で、人口は4,692

人で世帯数は1,533世帯である。高齢化率は、25.2%（飯田市全体で27.2%）である。

座光寺地区は、2007（平成19）年に地域自治組織へ移行し、「座光寺地域自治会」というまちづくり委員会は、5つの委員会と特別委員会を設置し（図表19）、全委員数は198人である。

第2節 座光寺公民館

1 座光寺公民館の概要

飯田市の地区公民館とする座光寺公民館は、1986（昭和61）年に建設され、対象地域の人口は約4,692人、対象地域の面積は8.94㎏で、建物の専用面積は901.6㎡である。公民館の館長は、地域住民から選出された非常勤特別職である。また、座光寺自治振興センターの所長が副館長補佐として任命され、自治振興センター業務と公民館業務の連携調整を図る役割を担っている¹⁰³。公民館では、文化部（委員18名）、体育部（同11名）、広報部（同9名）、健全育成部（24名）を設けており、計63名の公民館委員がいる。

公民館の基本方針は、座光寺地域づくりの「文化と歴史の薫る心豊かに暮らせる麻績の里座光寺」という目標、および「自ら考え自ら行なう」という自立の精神に即し、公民館活動の原点に立ち返り、「自ら考え自ら行なう」を公民館活動の基本に据えている¹⁰⁴。公民館の事業には、「文化事業」、「広報事業」、「体育事業」、「育成事業」などがあり、「地域づくりフォーラム」が毎年定例の事業とされている。この地域づくりフォーラムは2003（平成15）年度より公民館を主体に、各種団体長が集まり地域づくりフォーラム運営委員組織を設立し、年約4回運営委員会および分科会を行う。「地域の課題は地域で解決」を共通認識に、地域で課題解決に取り組むことを目的とする。フォーラムテーマの「健康で安心して暮らせる麻績の里」に対し、2つの分科会「子育て分科会」と「地域自治分科会」を設置し、実践に向けた検証と取り組みを行う。この地域フォーラムは座光寺公民館

¹⁰² 座光寺の概要は、先方当日配布資料「座光寺地区について」、および『私たちのふるさと座光寺』に基づき、まとめた。私たちのふるさと座光寺編集委員会編『私たちのふるさと座光寺』座光寺公民館、2009年、pp.13-17、141。

¹⁰³ 飯田市教育委員会『平成21年度教育要覧』飯田市教育委員会、2009年、pp.143-145。

¹⁰⁴ 「長野県飯田市 | 飯田市役所」

<http://www.city.iida.lg.jp/iidaspypher/www/service/detail.jsp?id=4304>（平成21年度・座光寺公民館基本方針、最終アクセス日：2010年4月12日）

の柱事業とされ、各種団体が組織化できたことは今後の地域づくりにとって大きく期待される。

2 座光寺公民館での文化活動¹⁰⁵

座光寺公民館で行う文化、地域づくり事業は、学級講座の「竹田糸操り人形製作講座」、および文化事業の「座光寺人形劇まつり」、「座光寺地域文化祭」などがある。

(1) 「竹田糸操り人形製作講座」

一般と子供向けの月 3 回の年間講座である。一般講座は、人形の製作及び実技を習い、小学生による子供向け講座では、例年 8 月のいいだ人形劇フェスタの地区公演や 2 月の座光寺文化祭に向けて、自作の人形を使い創作人形劇の上演に取り組んでいる。

(2) 座光寺人形劇まつり

座光寺人形劇まつり実行委員会を組織し、地区公演を開催している。地区公演を「座光寺人形劇まつり」と称し、地域の特色を生かす企画公演を行っている。地域が主体的に関わり、住民相互や人形劇人との交流の場として実施する。歴史的建造物を会場に使用した公演・屋台の出展等、観賞のみのフェスタ概念を覆すモノ作りに取り組んでいる。

(3) 座光寺地区文化祭

地域のみんなでつくる文化の祭典として位置づけられ、多彩な催しを毎年 2 月上旬に行う。例年行われるグループ・サークル、各種団体の作品展示や芸能発表、福祉バザー、お祭り広場などのほか、特別展として地元著名人の作品展などを開催する。また、子供を対象とした体験コーナーを設けることによって、その参加を促している。この文化祭は、単にグループ・サークルの発表・展示の場だ

¹⁰⁵ 平成 17 年度から 20 年度までの「座光寺公民館活動記録」を参照。

「長野県飯田市 | 飯田市役所」
<http://www.city.iida.lg.jp/iidaspher/www/service/detail.jsp?id=2414>、
<http://www.city.iida.lg.jp/iidaspher/www/service/detail.jsp?id=2465>、
<http://www.city.iida.lg.jp/iidaspher/www/service/detail.jsp?id=2520>、
<http://www.city.iida.lg.jp/iidaspher/www/service/detail.jsp?id=4261>（最終アクセス日：2010 年 4 月 12 日）

けではなく、地域を見つめ直すという視点から、地域住民が一堂に会して、「地域づくりのありかた」について考える良いきっかけづくりになったという。

第 3 節 座光寺地区の地域づくり¹⁰⁶

座光寺地区は、飯田市の市制改革である地域自治組織の発足に合わせ、2005（平成 17）年に地域を目指す将来像および基本構想・基本計画を策定した。座光寺地域づくりの将来像は、「文化と歴史の薫る、心豊かに暮らせる麻績の里 座光寺～自ら考え自ら行動する里づくり～」であり、住民が積極的に参加し地域の持つ優れた特性（里山、文化、歴史、景観、桜等）を生かし、皆で、自ら考え自ら行動し、地域の個性を確立していこうとする活動と努力により、明るく心豊かに暮らせる地域づくりである。この将来像の実現に向け、座光寺地区の基本構想・基本計画（2007（平成 19）～2016（平成 28）年度）において、主要な施策を 6 つの里づくり¹⁰⁷に体系化し、そして重点的に取り組む 5 つの課題を上げた¹⁰⁸。この構想を推進するために、座光寺地区では、2007（平成 19）年に「座光寺地域自治会」というまちづくり委員会が設置され、地域自治組織へ移行した。この「座光寺地域自治会」は、既存の 9 団体から、5 つの委員

¹⁰⁶ 座光寺地区の地域づくりについては、小島稔公民館長の紹介、先方当日配布資料の「座光寺地区の地域づくりについて」および『座光寺地域基本構想・基本計画』を参照。『座光寺地域基本構想・基本計画』は自治会員をはじめ、各種団体、地域代表、公募委員、顧問として参画をお願いした学識経験者、そして支所職員などの参加で作られた。座光寺地域自治会「文化と歴史の薫る・心豊かに暮らせる『麻績の里 座光寺』：自ら行動する里づくり」（『座光寺地域基本構想・基本計画』座光寺地域自治会、2007 年、p.44。

¹⁰⁷ 6 つの里づくりとは、「心通い合うふれあいの里づくり」、「地域を愛し自ら行動する人が育つ里づくり」、「自然、歴史・文化の誇れる里づくり」、「快適で、安心・安全なやすらぎの里づくり」、「地域の特性が光る活力ある産業の里づくり」、「麻績の里づくりを支える基盤整備」である。同上、p.8。

¹⁰⁸ 5 つの課題とは、「くだものの里づくり」、「麻績の里の振興」、「地域内を結ぶ道路ネットワークの整備」、「親しみもてる天竜川河川敷の創造」、「歴史文化を活かした人づくり」である。同上、p.9。

会（自治委員会、環境衛生委員会、生活安全委員会、健康福祉委員会、公民館委員会）になり、また5つの特別委員会も設置しており、全委員数は延べ198人である。「座光寺地域自治会」を編成するにあたって、特に重点が置かれたのは、従来の指示待ち、請負の自治からの脱却である。これにより、今まで行政からの指示および指導を住民に伝達するだけの自治方式から、現在の「座光寺地域自治会」の組織編成に変わることができた（図表19）。自治会の特徴は、5つの委員会の上に「麻績の里座光寺振興会議」を設置し、委員会同士は、この振興会議で連携し、協力し、話し合う。「麻績の里座光寺振興会議」は、最高の議決および執行の機関である。

今回座光寺公民館の訪問において、小島稔館長から、特に、文化を中心とする「麻績の里の振興」という課題に関連する、2009（平成21）年度第25回ムトス飯田賞¹⁰⁹を受賞し、表彰された「麻績の里振興委員会」を紹介して頂いた。

1 麻績の里振興委員会の発足までの変遷

麻績は、座光寺全体をさすが、麻績の里振興委員会の対象地域は、主に文化資源が集中する地区を中心とする。この文化地区において、1999（平成11）年に麻績の里振興委員会が立ち上げられる前に、1989（平成元）年に元善光寺公園整備委員会が発足した。当時はこの文化地区が人形施設の拠点とされ、地域住民から出された体育館建設の要望も市に受け入れられたが、当時財政難で、実現できなかった。1993（平成5）年に、壮年団および史学会は、活発に自治会に住民側の要望および意見を出し、更に、市の計画に対し、厳しい質問を行った。1996（平成8）年に、飯田市は、この地区において、1873年に作

られ、歌舞伎の舞台としても学校としても使われた麻績校舎の復元工事を行い、北部コミュニティ・センター（麻績の館）及び竹田人形館の建設を行った。上述の文化施設の建設は、1995（平成7）年度以降に具体化し、1998（平成10）年度に完成した。しかし、これらは市と自治体の主導で進行され、住民の願いとは少しずれた面があり、作られた施設は有効活用を図る必要性が求められた。

2 麻績の里振興委員会事業活動の変遷

1999（平成11）年、教育委員会は、麻績の里を竹田人形館、麻績の校舎、麻績の館の3つに限定し、自治会に「麻績の里の振興」を要請し、これらの文化施設の活用を促した。自治会はこの要請を受け、23団体、39名の委員から、「麻績の里振興委員会」を結成した。2002（平成14）年までは、その活動は主に、麻績の施設の有効利用、史跡環境の整備、舞台校舎・竹田人形館を文化拠点にすることの3つを中心として行われた。これらの活動により、竹田人形を支える会が結成された。そして、地域の文化財を紹介する麻績の里のマップの作成、元善光寺の案内図板の作成、文化財等を解説する立て看板・標柱の設置、南本城での講演会・現地学習会の実施、麻績校舎の読み物づくりなど、地域資源の発掘および世に出す活動を行う、などの成果が挙げられる。

2003（平成15）年、麻績の里振興委員会は、今までの歩み、および自治体との関わりを整理するため、1年間の活動を休止した。2004（平成16）年に一般公募委員21名（30代の若手が10名）を中心に、再スタートした。この再発足に伴う取り組みの検討と活動内容は、元善光寺を含めた一帯的な振興、南本城を核にした城跡の公園整備、文化施設の有効利用および環境整備、地域に残る文化財・自然の保全管理の4つを中心とする。その成果として、現在、地区にある施設の有効利用に加え、麻績の里舞台桜は有名になり、南本城の公園化も進んだこと、城跡は市の指定史跡になり、元善光寺への遊歩道も手作りで復活したこと、更に最も重要なのは住民の文化度が高まったことが挙げられる。

麻績の里振興委員会は今後の課題が、地域の住民を担い手として、桜保護、南本城公園化、文化ゾーン（後述）周辺の道路改良計画、元善光寺との一体的な振興など、恒川清水を

¹⁰⁹ 飯田市では「ムトス」を地域づくりの合言葉にし、私たち一人ひとりの心の中にある、「愛する地域を想い、自分ができることからやってみよう」とする自発的な意志や意欲、具体的な行動による地域づくりをめざしている。また、ムトス飯田賞とは、まちづくりへの参画意識を高めるきっかけづくりを目的とする賞である。

「長野県飯田市 | 飯田市役所」

<http://www.city.iida.lg.jp/iidasypher/www/info/detail.jsp?id=1341>、

<http://www.city.iida.lg.jp/iidasypher/www/info/detail.jsp?id=1342>（最終アクセス日：2010年4月12日）

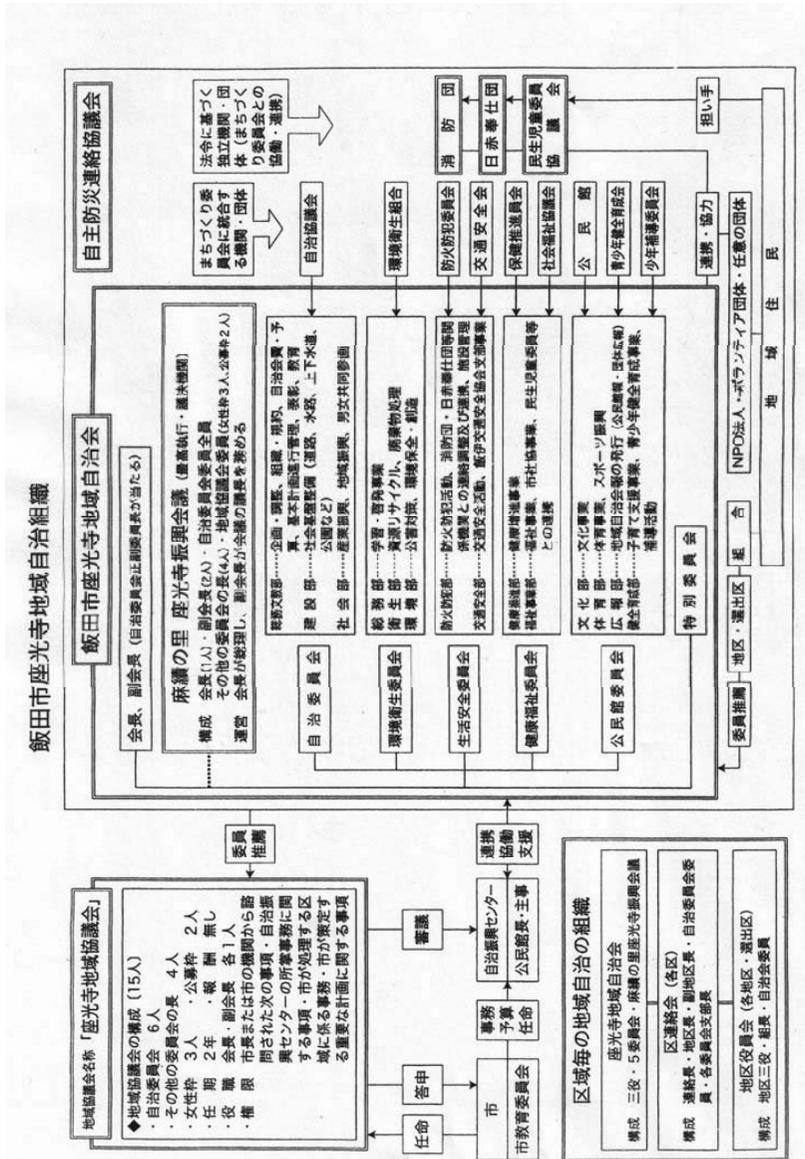
中心にした郡衙遺跡保存など、地域全体に資源発掘、保存活動を広げていくこととされる。これらを担うのは地域の住民であるとされ、そして座光寺の土地利用計画の活用も期待される。

3 座光寺の土地利用計画の「麻績の里文化ゾーン」の設置

座光寺地区はその地域づくりの方針に従

って、地域の特性と個性を生かした土地利用に重点的に取り組むゾーンを設け、具体化に向けた作業を進めている。設定されたゾーンの中には、「森林環境保全」、「くだもの里」、「住宅環境創造」などのゾーンのほか、特に、文化づくりを重視する「麻績の里文化ゾーン」(図表 20) が設定されている。この麻績の里文化ゾーンは、旧座光寺麻績の学校校舎をはじめとして「麻績の里」を象徴する歴

〈図表 19〉 飯田市座光寺地域自治組織



出典：座光寺地域自治会「文化と歴史の薫る・心豊かに暮らせる『麻績の里 座光寺』：自ら行動する里づくり」(『座光寺地域基本構想・基本計画』) 座光寺地域自治会、2007年、p.45。

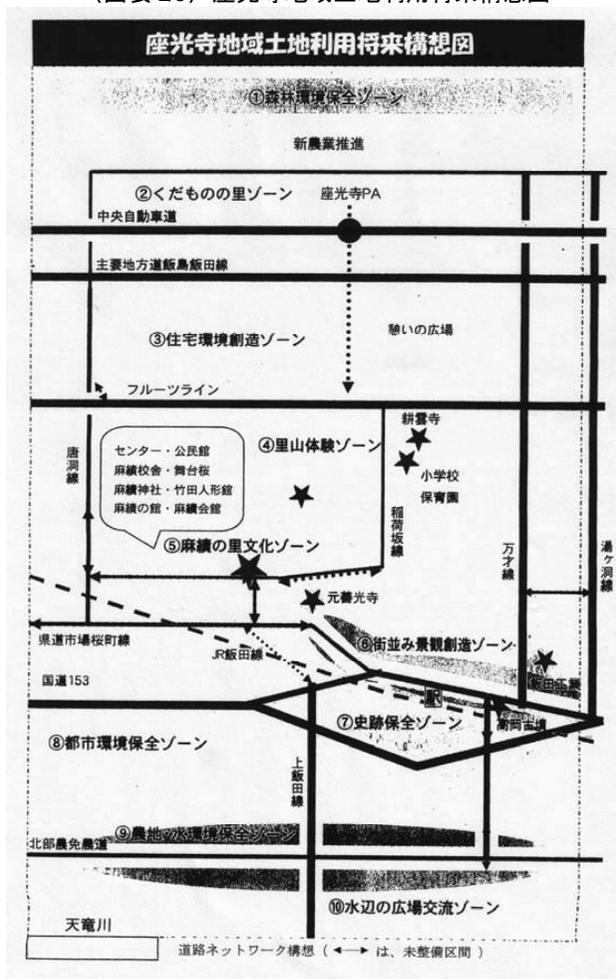
史・文化資産が数多く存在しており、それらを保全し、良好な景観を育成することが求められている。ここでは、自治振興センター、公民館、麻績の校舎、舞台桜、麻績神社、竹田人形館、麻績の館、麻績会館などが地域づくりの施設や資源として、非常に重視されている。このゾーンの基本的な方針は、歴史・文化資産を保全し、文化と歴史の薫る麻績の里にふさわしい景観を目指し、里山、農村風景、歴史・文化資産などが融合した景観を

とである¹¹⁰。

第4節 考察と今後の課題

座光寺地区は、歴史的、文化的な資源をたくさん有し、文化資源の保護、発掘、広がりを中心課題として、地域づくりを進展させ続けている。文化的中心地区のまちづくりを行う麻績の里振興委員会の運営は、座光寺公民館委員やそのOBによる方向づけによって、発展した面が強いとされる。地域マップおよ

〈図表 20〉座光寺地域土地利用将来構想図



出典：私たちのふるさと座光寺編集委員会編『私たちのふるさと座光寺』座光寺公民館、2009年、p.157。

るため、地域の歴史的資産を生かした計画的な土地利用に向けた取り組みを支援するこ

¹¹⁰ 「座光寺地域土地利用方針（素案）」を参照。
「長野県飯田市 | 飯田市役所」
http://www.city.iida.lg.jp/iidaspypher/open_imgs/info/0000000168_0000008688.pdf（最終アクセス日：2010年4月12日）

び看板づくり、公民館の健全育成部の「子ども桜ガイド」の組織・指導、公民館歴史資料製作委員会による地域学習に役立つ「私たちのふるさと座光寺」の出版など、座光寺公民館は、麻績の里振興委員会の活動に積極的に参加している。座光寺公民館の事業内容は、「竹田糸操り人形製作講座」、「座光寺人形劇まつり」、「座光寺地区文化祭」などを通じ、地域文化を伝承し、広める一方、「地域づくりフォーラム」の導入により、地域課題の共通理解を求めることは、地域のさまざまな面と密着し、公民館の住民参加を促すことに、高い成果が得られると考えられる。今回の学習会で、2009（平成 21）年度から座光寺公民館長の職にあり、麻績の里振興委員会の事業を紹介してくださった、小島稔館長は、2004（平成 16）年の麻績の里振興委員会再発足の際、自治会の委員でありながら、麻績の里振興委員会の委員長を兼任した経験があり、同館長より座光寺公民館における今後麻績の里振興委員会の文化づくりとの連携が更に発揮されることと考える。

執筆者の出身地である台湾には、現在主な生涯学習施設として、行政の指導により設置され、官設民営の形で運営される「コミュニティ大学（社区大学）」がある。大学という名称がついているが、地域の一般成人に向けた社会教育施設であり、発足してから 11 年、現在既に 100 校以上が設置されている。日本の公民館と同じく社会教育施設と位置づけられるコミュニティ大学は、主に趣味、教養、地域課題などの各分野に関する講座を設け、地域住民に学習機会を提供している。学習者に多様な学習活動を提供する一方、コミュニティ大学のもう一つの中心的な理念は、まちづくりおよび住民参加を促すことにより、住民の地域意識・市民意識を高めることである。しかし、殆どのコミュニティ大学は行政による補助金への依頼が大きく、財政的、人的資源の有効活用という課題を抱えている。今回の飯田市社会教育調査を契機として、座光寺公民館そして飯田市の公民館の運営内容を調査し、その実績および事例を、台湾におけるコミュニティ大学の運営、行政との関わり、そしてまちづくりに関する事業内容、その他の団体との連携方式などに活かしたいと考えている。また、座光寺公民館のように、文化事業に参入することの成果は、地域文化資源の保存、発掘、再発見が重要な課題とされ

る台湾の地域団体、学習施設に対しても非常に重要な示唆を持つ。今後の課題として、座光寺公民館と麻績の里振興委員会、そして座光寺地域自治会との連携関係について、調査を行いたいと考えている。例えば、台湾のコミュニティ大学におけるまちづくりに関する事業は、主に以下の 3 種類に分けられる。1 つは、運営側による定期的に計画された講座である。もう 1 つは、短期的に、国のまちづくり政策に即し計画書の審査を経てから行われるまちづくり講座・事業、最後に行政側の依頼によって設置されるまちづくり講座・事業である。したがって、座光寺公民館における文化づくり、まちづくり関連事業が、どのように形成され、そして麻績の里振興委員会および座光寺地域自治会の事業計画と実行の自主性がどうなっているかは、今後の調査課題である。

（王 美璇）

第 9 章 中山間地区のまちづくり（柿野沢集落）¹¹¹

第 1 節 柿野沢集落の概要

飯田街地から車で 30 分、平均標高 500 メートル、眼下に天竜川を望む段丘の上に位置している柿野沢集落は、昔から米・酪農・養蚕で発展してきた。柿野沢のある下久堅地区は江戸時代からずっと和紙産業が中心となっていたが、現在、産業としてはもう終わってしまい、地域の伝統文化として定着しつつある。

89 世帯で大体 300 余人の小さい集落であるが、65 歳以上の住民は 85 人もおり、高齢化がかなり進んでいる。しかも、中山間地にあるため、山をけずりにとって農産物を作っている。200 メートルもの高低差がある急峻な地形の中で生活しているにもかかわらず、地域の住民たちは、きのうよりすこしでも良い生活環境を創るための努力を止まることなく今日まで続けてきた。昔の公会堂づくり、道づくり運動から、現在の集落営農組合の設立まで、さまざまな活動から、集落として自立しようとする姿勢と住民たちの互助の精

¹¹¹ 本章は、現地調査における、飯田市柿野沢農家組合の代表・宮内博司さんのお話及び当日の配布資料に基づくものである。

神がうかがわれる。

第2節 柿野沢集落の地域づくり

1 地域の和——先人の努力

柿野沢には、明治、大正にわたる60年の間、集落に2ヶ所の神社があったことから、北部、南部の和の取りにくいところであった。1932（昭和7）年、地域の人たちが集落の和を目指して、北と南から歩数で距離を測り、縦も横も真ん中のところで公会堂を作った。こういう公会堂を作ることは、集落を一つにまとめる地域づくりの先駆けとなった。

この動きを継承し、1946（昭和21）年に「柿野沢の道づくり運動」が発足した。それは、食糧増産のために、道路の整備がまず必要となったからである。そこで、財産割の資金と労力奉仕によって、「手弁当道路」12キロメートルが着工することとなった。常に互いの顔を見ながら汗を流す道づくりから、いつしか集落の結束を強めると同時に、労力提供のできない家庭をかばい合う互助の精神を育てていった。これら区全体の熱意は柿野沢の基本となり、それ以降、大きな公費が集落内へ入ってくる大きな先鞭となっている。

これらの道路、環境の整備事業は、地元資金の借入によるものであった。当時、集落の環境整備事業に数多くの住民の関心が寄せてきた。事業での成功者や歴代区長をはじめ、住民の寄付によって、700万円を集めた。そして、当時貯金の金利が5.6%という高さであったため、皆の合意で、残りのお金を地元の郵便局に預けることにした。そうすることで、10年の預金期間を経て、元金に金利がつき、元のお金が返ってきた。そういう中、住民たちは資金の使い方の重要性を覚え、自分たちの知恵をいかして自助努力の意欲が高まってきた。

2 農業の問題と振興——無人販売と「ひさかた御膳」

柿野沢は中山間地に位置するため、耕地不足という実情に加え、1980年代から社会環境変化・輸入農産物や食生活の変化による農産物価格の低迷などの原因で、区の産業構造が急激な変化が起こり、兼業化・離農する者が続出し、高齢化や後継者不足といった問題が深刻化していく。そこで、柿野沢が農業振興のために、さまざまな試みを行ってきた。それを以下にまとめる。

(1) 地域合意の形成¹¹²

飯田市は、1988（昭和63）年、地方が大都市一極集中に対して、いかに地方自立をするかという生き残りをかけて、「農業地域マネジメント事業」を行い始めた。基本とする理念は、農家・会社員・自営業などそこに暮らすすべての人たちが、地域にどのような課題があるか掘り起こし、皆で解決方法を考え、労力やお金を出して解決するという「集落複合経営」である。つまり、生産を主体とする農業振興ではなく、地域づくりを行う農村振興に中山間地域の命運を託したのである。

この考えは旧村単位の地区会議を経て、500を越える集落単位の浸透していった。柿野沢は昔から道づくり運動といったような長い村づくりの歴史の上に、現在、こういう取組がかなり進んでいる。高齢化の兆しは見えていたものの、土地に対する執着心がまだまだ強い時代であるためか、30戸の農地を、中核となる酪農農家に集積することに成功した。また、このような地域づくりの営みの中、30～40代が中心的役割を果たすことで、集落の担い手として自立心が芽生え、さらに兼業農家に地域農業の関心が生じ始めた。

(2) 農産物の加工販売

柿野沢は地域住民すべてが力を合わせて地域づくりを行った先進地として注目を集めている。柿野沢はかつて農産改良普及所が共同炊事のモデル地域に指定したこともあり、婦人たちのまとまりのよい地域で、婦人組織の一つに「こぶし会」がある。当時、集落の南半分の殆どの主婦たちが加入し、地域づくりのベースとなっていた。農産物、農産加工品の生産が活発になったきっかけのひとつに、1985（昭和60）年ころよりこの南側の婦人たちが始めた無人販売があった。正月を除く毎朝6時半頃から日暮れまで、自分の家の記号を書いてあるビニール袋で農産物を売っている。当番が出荷と残品を記帳し、後日清算する。このような無人販売所は現在、集落の北と南に一個ずつ設置してある。この無人販売の成功により、地域の生産は活気づき、耕作放棄地が減少した。

農業振興のために地域挙げの試みのもう一つの成功事例として、「ひさかた御膳」が

¹¹² 「地域合意形成の進め方」（配布資料）を参照。

あげられる。地域の女性たちが地元産の米や野菜、果物を使って御膳を手作りし、県内外から地域を訪れる人たちにふるまうようになって、すでに十五年以上になった。この御膳は1食1500円、10食以上の注文があると用意する。口コミなどで評判になり、全国各地の団体が訪れて御膳を味わい、市内の会合や宴席でも重宝され、時期によっては週2、3回の注文を受けるまでになった。

実は、この御膳をつくるという発想は、前述の無人販売の実践とは無関係とは言えない。住民たちは無人販売を利用して自分の作った農産物を直売している。しかし、売れ残るものもある。その売れ残ったものは持ち帰り、捨てるしかない。せっかくの農産物を捨てることなく利用することができないかと考えたすえ、地域の住民たちが思いついたのは、この御膳づくりである。1993（平成5）年、はじめてこの地域で行われた。県の地方事務所職員、それから市役所職員、団体の役員など30余人に、ふるまったところ、好評となり、採用された。それを経て定着し、現在も「ひさかた御膳」として続いている。

「学生も一般成人もとうとう入ってきた。すると、お金がとれるわけ、そして、地域のおばちゃんたちは無人販売の収入や料理をすることなどのこういうような農産物の売上代金で、お菓子も魚も買えるようになった。」

このような新しい農業模索の中、所得の増大を実現しただけではなく、兼業農家の人にも農業に対する関心が高まってきた。そして、手間をかけて御膳をつくることによって、共同作業で人とのつながりが強くなり、地域の和が保たれていくという良性循環に入っていく。現在、「ひさかた御膳」は地域でつくった文化として、柿野沢集落のアピールポイントとなり、伝承され続いている。

3 過疎化と高齢化——「準限界集落」

柿野沢集落の概要で書いてあるように、集落人口300人余り、中には、65歳以上は85人にも達している。それに、若者の都市への出稼ぎによって、集落の後継者不足という現代日本の中山間地に共通した課題を抱えている。長野大学教授の大野晃氏は、「65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超え、冠婚

葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれている集落」を「限界集落」と定義し、その予備軍的存在として「55歳以上の人口が既に50%を超えており、現在は集落の担い手が確保されているものの、近い将来その確保が難しくなっている集落」を「準限界集落」としている¹¹³。

「準限界集落」であることと自覚している柿野沢は、それに立ち向かい、集落再生を目指し、住民自治を基本にした持続的な地域づくりを求めている。とても前向きな姿を示している。

「限界集落であっても、やはり基本の住民の自治というのが求められている。住民の自治があることによって、少子高齢化の世の中ではあるけれども、人が住む以上は、いくら戸数が少なくなり、お年寄りだけの家庭になったとしても、地域で元気に生きてこられる限りでは、これは限界集落までとは言えないと思っております。...周囲には、この地域がだめだというような考え方を持たれる方がいますが、そうではなくて、例えば、四人でも五人でも集まって、元気にやるうじゃないかという前向きな話をいっぱい出すことが地域を興すことになるということを感じております。」

地域を活性化し、地域環境を改善するには、都市と農村の交流観光を積極的に取り組んできた。「観光で地域づくり、まちづくりって一言にいわれますけれども、そんなにやさしいものではない。地域づくりというのは、やはりその地方の特徴と繋がるものである。」と宮内さんは言う。柿野沢は地域にあるものをすべて生かし、生活環境の整備から、「ひさかた御膳」をはじめとする農産物の加工販売まで、さまざまな工夫をしてきた。

そんな中、教育改革の流れの中で子どもの「生きる力」を育むことが提唱され、自然資源に恵まれている農村空間の持つ「生きる力」の教育力に対する期待が高まっている。現在、全国の中学校、大学の学生が体験旅行として集落を訪れている。そのような学生に対して、地域センターでは食事を提供し、五平もち体験、餅つき体験、農家料理体験など

¹¹³ 内田純一「限界集落と地域づくり」（配布資料）を参照。

いろいろな交流が行われるようになり、活発な地域づくり、まちづくりができるようになってきている。

また将来、山間の農地が周囲の山々や水辺と調和し、形成する美しい景観、農地・水路・ため池・農業用施設などを活用した有形無形の宝を再発見し、地域の豊かな知恵を添え、半定住さらに定住者を引き寄せるという考えも今後の事業として検討されている。

4 伝統文化の継承——和紙づくり¹¹⁴

柿野沢集落ではかつて、和紙づくりがこの地域の中央産業として発展してきた。しかも、南信州において柿野沢は紙すきの最も活発なところでもあり、7割の住民が和紙を生産していた。しかし、洋紙の普及に伴って、この地域では、和紙づくりがだんだん衰退し、現在、産業としては機能していないが、地域の伝統文化として定着しつつある。1996（平成8）年から、公民館の文化委員によって「ひさかた和紙の里プロジェクト」が発足し、和紙の講座などの活動を経て、2004（平成16）年に、正式に学習を目的とした活動として組織されてきた。

「小学生が手作りの和紙を卒業証書や凧にする活動も定着している。和紙には、ふんわりした感触がある。自らの手すきなら愛着も増す。作業を通じて、地域の歴史や誇りを実感できる。」

そして、地域の人だけが参加しているのではなく、全国から訪れた人々が下久堅の和紙の歴史や伝統を体験し、受け継ぐようになってきている。集いは、産地や技術を残していくために関係者が学び励まし合う大切な場となっている。

第3節 まとめと考察

柿野沢の地域づくりについての宮内さんの説明の中に、この地域に対する誇りを私は感じた。中山間地でありながらも、前向きに現状を変えようとする頑張る姿に感心した。そして、互いに助け合ったり、合意に基づいて地域挙げて活動を行ったりすることにも人間同土間の温かさを覚えた。

地域を活性化し、農業を振興するには、地

域皆の力が必要であるのは事実である。柿野沢の事例によれば、現在皆の力を一つにすることができるのは、昔公会堂づくり・道づくりといった先人の努力あつてのことである。今回の調査では、当時、公会堂を一つにしようとする考えは、実行に移すまで、どのような経緯があつて、どのような動機であつたのかについての話は十分に聞くことができず、今日の柿野沢集落に大きな影響を与え、とても肝心となるこの公会堂づくりという行動をどのように解釈すべきかまだわからない。住民の自治意識の上昇は公会堂づくりという共同行動がひきおこした必然の結果なのだろうか、それとも、他に何らかの原因によって、住民自治意識がそもそも高く、公会堂づくりと道普請がただそれを実証するあるいはより高めたのだろうか。つまり、この地域の求心力はそもそもどうやって形成されたのか今はまだ分からない部分である。柿野沢の成果や経験を広く他地域に活かさせるには、まずこの因果関係を明らかにすることが重要である。

また、柿野沢集落は人口が少なく、小さい集落であるにも関わらず、集落内組織がしっかりできており、各自責任をもって分担している。柿野沢区会をはじめ、柿野沢集落営農組合、柿野沢生産組合、柿野沢農家組合、柿野沢公民館、そして柿野沢区道路委員会などがあげられる。ここでは、各組織はどのように運営をし、さらに、各組織間はどういう関係を持っているのかについて関心が寄せられている。特に、公民館で行われている文化的事業とその地域のまちづくりとはどんな関係を持っているのかは今後の課題にしたいと考えている。

今回の調査では、時間の関係で、十分な考察ができなかった。そして、住民たちの持っている価値観と生活実態についての考察も宮内さんのお話をうかがうのみにとどまってしまった。次回の考察では、今抱えている疑問を解くために、この集落の従来の価値観と歴史について、現地の住民たちと深く交流したいと考えている。

（汪 乃佳）

第10章 まちづくり委員会と公民館の連携（三穂地区）

¹¹⁴ 「和紙作り『楽しみ』と『ひさかた和紙』楽しみに」（配布資料）を参照。

第1節 三穂地区の概要

三穂地区は飯田市三穂盆地に位置し、三穂丘陵と高松丘陵に囲まれ、豊かな自然に恵まれた里である。自然だけではなく、歴史・文化に恵まれた地区でもある。1940年代には2,800人ほどの人口だったが、現在の人口は1,572人、世帯数447世帯である(2010(平成22)年2月末現在)¹¹⁵。しかも、少子高齢化が進んでおり、中山間地の課題がここにもある。三穂地区は一世帯あたりの人数が平均3.5人を上回っており(第2章、〈図表7〉)を参照のこと)、この一世帯あたりの人数は飯田市のなかで最も多くなっている。つまり、この地区は単身世帯や核家族世帯の割合が他の地区と比べて低いことが予想され、地域コミュニティとしての基盤が強固に維持されている地域であると考えられる。

第2節 三穂地区自治組織について

三穂地区では、まちづくり委員会会長の塩澤正夫氏と、公民館長の今村嘉孝氏にお話を伺うことができた。本節は塩澤氏のお話を中心にまとめたものである。

以前から、青少年健全育成組織、自治会そして公民館の間には、ほとんど横の連携がない。しかし地域住民は1つであるという認識から、地域の課題を共有し、協力して取り組むことが必要であることは認識されている。現在はまちづくり委員会ができ、この地域を一体化して活動を行いやすくなったということであった。それと同時に、まちづくり委員会の具体的な役割や、公民館との連携のやり方などはこの地区の地域づくりで一番重大な課題となっている。

まずは、三穂地区の自治組織の概要についてである(図表21)。まちづくり委員会の中には、自治振興委員会、生活安全委員会、健康福祉委員会、環境委員会、子ども育成委員会、公民館という専門委員会がある。また、会長、副会長、会計のほか、自治振興委員会のなかの総務委員会委員長、建設産業委員会委員長、専門委員会のそれぞれの委員長、館長の合計10名で、三穂地区委員長会が組織している。この10名の委員長たちは、充て職などではなく、地域全体からの指名で選任されている。それ以外に関係団体があり、消防団をはじめ、日赤奉仕団、民生児童委員など

がある。しかし、それらの委員長は地区委員長会に入っておらず、独自で活動を行っている。

具体的には、まちづくり委員会の各委員会の役割は以下の通りである。

- ・ 総務委員会：この地域全体にかかわる総務担当である。
- ・ 建設産業委員会：主に道路行政との関係で、市、県、また国に働きかけている。それから、地域の産業をよりいい方向に努力する。
- ・ 生活安全委員会：主に安全を保つことに押さえている。例えば、街灯の調子を確認することや小学校と保育園の子どもの安全指導等。
- ・ 健康福祉委員会：高齢者の方を集めて、楽しみを持つような、それから、横のつながりを持つような生活を送らせるために様々な活動を行っている。それ以外、結婚相談等も行っている。
- ・ 環境委員会：地区の環境全体を見ながら、具体的な環境問題に取り組んでいる。蛍のある地区にするために、河川を清掃し、ゴミが散らかっているところをきれいにするなど、さまざまな環境美化事業に取り組んでいる。
- ・ 子ども育成委員会：保育園から小中学の子どもたちにどんな体験をさせるかを考える委員会である。現在は抹茶クラブ、調理教室などで子どもたちに体験学習をさせている。
- ・ 公民館：各団体と連携して、学習活動と住民交流を支援する。

第3節 三穂公民館について

1 三穂公民館の方針と役割

本節は公民館長の今村氏の話を中心に構成している。

三穂公民館は飯田市の公民館活動の4つの運営原則を踏まえ、自分たちの活動方針を定めた。山間地耕地の荒廃化、少子高齢化そして住民の連帯感の希薄などの課題を認識しつつ、「いつまでも住み続けたいと実感できる三穂の里づくり」を目指し、以下の4つの方針を押さえて事業を進めている。

- ・ 住民が気軽に参加、自ら企画し創造する活動の支援
- ・ 住民の学習要求の的確な把握と学級講座の支援

¹¹⁵ 飯田市公表データより。

- ・ 地区住民の自治・連帯意識の高揚推進
- ・ まちづくり各委員会及び他団体との課題の共有及び連携協調

一方、館長は、地域の将来を担うことのできる人材を育つことが公民館の一番重要な役割だと意識している。公民館長と各委員長がしっかりと勉強してこそ、公民館を地域の担い手が育つ場にすることができる。公民館が存在する意味がそこにあるというように認識されているようであった。

2 公民館各事業の進め方：

三穂公民館の基本方針には公民館の重点事業について以下のように書いてある。

- ・ 乳幼児・家庭教育講座、高齢者及び女性向け学級、特設講座の開設充実
- ・ 郷土の自然や歴史について理解を深め、郷土愛の心を育む事業の推進
- ・ 健康増進、親睦や絆を深めるスポーツ事業の充実と工夫
- ・ まちづくり委員会他団体全てが連携し、全ての住民が楽しくふれあう夏祭り、運動会、文化祭の充実
- ・ グループ、サークル活動の育成支援
- ・ 他地区との交流事業
- ・ 男女共同参画社会及び人権に関わる学習への支援
- ・ 小中学校と連携した事業の育成推進

具体的には、年中行事として夏祭り、運動会の開催、成人式、そして神戸の真陽地区との交流活動がある。その他に、三穂の歴史を学ぶと同時に健康づくりを行うことを目的として、小学生からPTAや一般の方までを対象とするウォーキングコース「ふるさとめぐり三穂」、生活の中で感じている不安や心配事を女性の視点、生活者の視点で取り組む講座「ほっとけない楽習会」、子育てについて学習する乳幼児学級、人形浄瑠璃の継承を目指す伊豆木人形クラブなどがある。

ただし、小・中学校との連携事業は近年だんだん難しくなっている。それは、教育行政上、学校教員の土日勤務が難しいこともあるが、一番には学校長の考え方・意向に大きく依存するからだという。土・日曜日を利用して学校と連携して行われている活動が今後制限されることが懸念されている。三穂公民

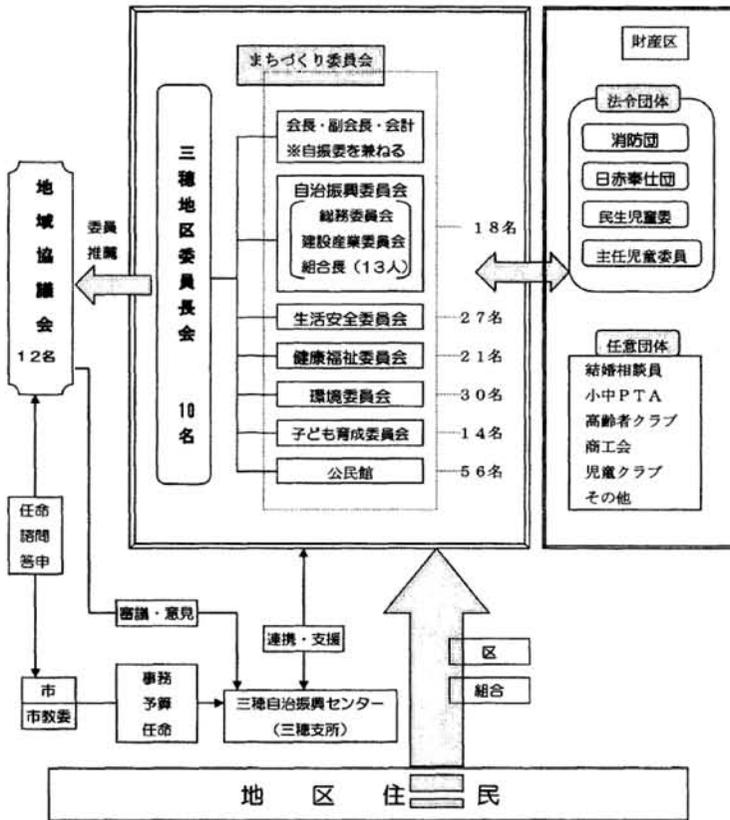
館長の話によると「やはり先生たちの協力をいただかないと、(連携事業が) おもしろくなくなる。...地域の活動に先生たちの顔が見えれば、子ども達の意識も非常に違う。教員に地域にも出てきてほしい。教室の中だけで子どもを判断してほしくない」。学社連携とその体制については、その方法などについては取り組みの中で大きな課題となっている。

夏祭り、運動会そして成人式などについては、まちづくり委員会が組織される前から、実行委員会という組織が設けられてきた。その実行委員会のメンバーは、現在三穂自治組織のメンバーとほぼ重複したような構成になっている。だから、組織の名前が変わっただけで、実質は昔のままであると言っても差し支えない。だが、今年の夏祭りの企画の段階から地元の高校生たちにも参加してもらい、地域をより一体化する動きが見られる。

公民館での住民交流事業として実施されてきた三穂地区と神戸の真陽地区との交流が、2010(平成22)年現在、14年目を迎えた。お互いに地域づくりや震災学習などについて交流し、交流を通じてお互いの地域づくりの実践を学びあっている。さらに、三穂小学校では修学旅行や社会見学として真陽地区を訪問し小学校同士の交流も実施していたが、2011(平成23)年度より取りやめとなった。

年中行事と交流活動の他に、公民館で通年行われている学級・講座やその他の活動もある。これらの活動は公民館内の4つの委員会が担当している。三穂公民館が他の公民館と違って特色を持っているのは、公民館の専門委員会として、女性委員会を設置している点である。当初、まちづくり委員会の発足にあたっては婦人会が組織されなかった。このことから、地域において女性の意見が反映されないことが心配された。その後、専門委員会の1つとして、女性委員会が設立され、地域の女性がいろいろなことを自由に発信できる場となっている。さらに公民館の各活動にも、女性委員会の方が積極的に取り組むようになった。公民館の活動の企画・立案・運営はこの4つの委員会によって地域住民の意見を吸収し実施されている。

〈図表 21〉 三穂地区の地域自治組織



3 人材の育成

先述の通り、三穂の公民館長は地域の将来の担い手を育成することを公民館の重要な役割として認識している。三穂公民館は昔から風通しがよく、PTA 活動とも密接に連携している。公民館の委員には消防団の経験者が多い。そして公民館での活動経験を活かしながら、自治会やまちづくり委員会の担い手として地域の中で育てていくという意識が存在している。

第4節 公民館とまちづくり委員会、公民館と学校との関係について

三穂地区は、地域自治組織を導入する以前から、公民館と地域住民のあいだの良好な関係性が構築されており、地区全体で課題を解決し、事業を進めてきている。そういう事情があるため、館長及びその他の関係者にとって、自治組織の導入による効果や変化は、まだ実感できていないようである。敢えて変化を指摘するとすれば、例えば地域行事の「主

催者」をどうするか、という点である。従前も現在も、地域行事や地域での活動は、地域が一体となって取り組むような風土ができており、どのような活動についても、「協力しない」ということはあり得ないが、形式的にどこが「主催」で他は「共催」等なのかについては、再考しなくてはならなくなっている。例えば、自治組織が導入された直後までは、成人式は公民館が主催していた。そして、自治協議会やまちづくり委員会は「来賓」として来てもらっていた。しかし、公民館がまちづくり委員会の組織に組み込まれたことにより、去年からまちづくり委員会も主催者として参画するようになり、公民館と一体となって事業に携わるという形式を採ることとなった。

一方、公民館と学校との関係は、地域自治組織の導入如何とは関連なく、課題が認識されているようである。前述の通り、地域が一体となって子どもの育成・教育に携わろうとするならば、地域と学校との連携・協働も重

要な課題となる。しかし、学校との連携の成否は、学校長をはじめとする管理職の意向が強い影響を持つので、学校長が代わると、それ以前は地域と学校が連携し実施していた地域行事も、その継続が難しくなる。もちろん、学校教員には法定の勤務時間があり、それを超過しての勤務（平日の残業や土日出勤）を職務として課することはできない。しかし少なくとも、両者が情報と課題意識を共有することは有効であり、そのための情報交換の機会も現在は十分に確保できていないとすれば、これは公民館だけの問題ではなく、教育行政の課題として検討しなくてはならないだろう。

第5節 考察と今後の課題

まず、三穂地区の人口構成からみられるように、3世代同居の家庭が多い。それは三穂地区及び三穂の住民自治にとってどういう意味を持っているだろう。第一に、三穂まちづくり委員長さんが言っていたように、おじいちゃん、おばあちゃんにうるさく言われていると、子どもたちが「非常に落ち着いている」と観られている。日本全体の核家族の進行に伴い、家庭の中では子育て資源が乏しくなっているのが現状であり、子どもの非行問題が深刻になっている。一方、三穂地区の子どもたちはこういったような家庭環境に恵まれ、元気に育てられて行くため、地区全体の安定にも貢献している。第二に、高齢者たちが皆で地域を見守ることができる。日本で、特に都市部では進んでいる近隣関係の希薄化問題に示されたように、地域がもともと持っていた子育て機能や監視機能などが喪失していく。他人事とみなされることが多くなっている。三穂地区では、地域の人と人との絆が強く、地域の人々も組織しやすいと思われる。そうすると、ふるさとへの愛着が子どもたちの中で自然と育まれるだろう。そういうように良い循環になっていく。そして、連携事業であろうと、地域行事であろうと、このような基盤があつてからこそ、うまく進めていこう。第三に、二点目ともつながるが、高齢者たちが講座などの地域活動に参加し、そこで見聞した情報を各家庭に持って帰ることができるという点である。地域のことを考える機会が多く、さらに住民の自治意識を促すだろう。

三穂公民館の女性委員会とまちづくり委

員会と連携して推進している事業である「ほっとけない楽習会」は、女性という生活者、当事者の力のいかした地域の教育力・地育力の向上と絆のある地域づくりを目的としている。現在では通年を通して学習会を実施し、普段の生活のなかで感じている身近な不安や心配事などを女性の視点で拾い出すことを中心に行われている¹¹⁶。連携の実態については、公民館主催、健康福祉委員会共催といったような形をとっているけれども、「仕事の分担をあまり意識したことがない」ようである（今村館長）。地域の課題であれば、地域全体で取り組むものだという意識がうかがわれる。

今回の調査は三穂の自治組織の概要だけについて伺ったため、焦点を絞ったものが書けなかった。三穂地区は気風の純朴な地域であるという印象が残った。こういうような地域での自治組織の動きについての研究は、日本中山間地全体にとって重要な意味を持っていると思う。今後の調査では、特に高齢者と女性の自治組織における役割について分析したい。

（汪 乃佳・佐藤 智子）

第11章 公民館と学校の連携について （竜丘地区）

第1節 竜丘地区の概要

竜丘地区は、飯田市の中央部に位置しており、標高は365mから565mの間にある。面積7.9平方キロであり、人口が6,818人、世帯数2,274世帯（2010（平成22）年2月末現在）である。大正から1950年代中頃までは、桑園と水田が広がり、養蚕が盛んで、地域内に製糸工場もあった。戦後、農道建設によって、住環境や交通条件が整備され、さらに、宅地開発と共に、新住民が増加し、非農家や外国人が増えてきた。とはいえ、地区全体に田畑の面積が多く、昔から形成されてきた文化と伝統がよく保たれている地区である。

この地区には古墳をはじめ、著名な史跡がたくさんある。また、自然環境に恵まれ、ギフチョウの生息する地域でもある。そのような歴史と自然は、地区の住民たちに大切にさ

¹¹⁶ 当日配布資料「まちづくり委員会と公民館の連携の実態や成果」より。

れており、地域の象徴ともなっている。

竜丘地区は昔から教育実践を重視する地区であると認識されている。大正時代から培われてきた自由主義教育がこの地区では熱心に実践されていた。特に「自由画教育」が、後述するように、当時の自由主義教育の代表として現在まで語られてきている。

竜丘地区には、竜丘地区自治会の下に5つの集落自治会があり、さらにその下には常会と隣組の単位が存在して各世帯が組織されている。「まちづくり委員会」についても、竜丘地区全体の委員会と、5つの各集落を単位とした委員会がある。

竜丘地区公民館には5つの専門委員会がある。それは、文化、体育、広報、民俗資料保存、社会委員会である。通常は任期2年であるが、本館の文化委員会と体育委員会のみ、5年となっている。

第2節 学社連携の現状について

竜丘地区の学社連携の現状について、当地区公民館主事の下平氏より報告をしていただくことができた。以下はその報告内容を筆者なりにまとめたものである。

竜丘地区は公民館と住民団体の活動が非常に盛んな地域である。中でも、学校と連携して、子どもに自然や伝統に関わる体験させ、子どもの教育や育成を支援する事業が数多くある。具体的事例は以下の通りである。

(1) 古代史の学習

2010(平成22)年5月から、公民館の関係者たちが小学校の授業に参加し、高学年の子どもたちと一緒に埴輪を作ったりした。「古代人になった気分楽しく遊び、学び、体験しよう」がテーマだった。この体験を通して、子どもたちが古代人の生活に思いをはせ、「ものをつくる」ことのおもしろさと喜びを味わうことができた。¹¹⁷

(2) 丘のみちしるべ探検

2009(平成21)年度から、春の遠足を、ふるさと教材を利用した「丘のみちしるべ探検」に変更した。竜丘ふるさと教材について簡単に紹介すると、これは公民館により刊行され、竜丘地区の歴史、自然、教育施設、社会施設などを紹介したものである。2001(平成13)年に刊行され、全戸に配布された。

写真や地図の充実したふるさと教材である。こういう教材を利用して、「竜丘自由学校」の人たちが引率し、子どもたちに竜丘を説明しながら歩いている。

(3) 竜丘小学校クラブ活動

年間を通して行ってきた小学校クラブ活動は現在、20のクラブがあり、5~7月に集中して実施されている。主に「大人の学校」を中心とした地域の方が指導者になり、小学校の子どもたちに木工、おしなご、手話、書道、料理、陶芸、絵手紙、竹細工等いろいろな技を伝えている。1つのクラブに5、6人で、合わせて100人以上の方がこのクラブ活動にかかわっている。活動の最後には、発表会で成果を発表し、子どもたちが地域の人々と楽しい思い出を作る機会となっている。

(4) 小学校農業体験の支援

これは公民館と直接的な関係を持つ活動ではないが、「あぐりの田んぼ」というグループの方々が支援している事業である。小学生、特に5年生に稲づくりを体験させたりしている。ここには「あぐりの田んぼ」の方だけではなく、地域の人たちも積極的に参加している。

(5) 水辺の楽校

この事業は公民館の専門委員会の1つである「社会委員会」を中心に、他の専門委員会、分館、竜丘小学校PTA、自治会、壮年団が連携して行っている天竜川の整備活動のことである。天竜川は竜丘地区及び飯田市全体にとって不可欠な水源であり、生活用水や農業用水としても利用されている。その環境美化活動は、現在、小学校の授業でも活用されており、中学生も参加している。このように、地域資源を活用しつつ、環境を整備し、子どもたちに自然体験の場を提供している。

(6) 秋の親子ふれあいハイキング

公民館の専門委員会の1つである「文化委員会」が、子どもの体験学習の場を作るということで、里山について学習するイベントを実施している。竜丘には里山があるが、近年は荒れる傾向にある。そこで、「竜丘里山愛護会」が設立され、臼井にある竜丘地区財産区の山林を里山として多面的に活用されてきた。秋の親子ふれあいハイキングは、こういう背景の中で発足した。山の保護と区有林の価値を伝えることがその目的となっている。

(7) 中学生の運動会への参画

¹¹⁷ 「地育カブログ」<http://chiikuryoku.net/blog/2901>
(最終アクセス日：2010年9月26日)

竜丘の市民運動会の運営には中学生が参画する。

(8) 文化祭での展示

竜丘では、大正時代に「自由画教育」が取り生まれ、全国的に注目を集めていた。当時の学童の絵が多数保管されているが、今年から、6年生全員に一枚ずつ描いてもらい、後世に残すことになった。そして、文化祭の特別企画展では、現在の子どもたちの描いた絵と昔の児童の絵と並べて展示することになっている。そうすることで、子どもたちに地域の先人たちさらに後世とのつながりを実感させている。

(9) 放課後子ども教室

2007(平成19)年11月後半より竜丘小学校で「放課後子ども教室」が始まった。これは周知の通り文部科学省が推し進めている事業であり、該当小学校のすべての子どもを対象に、安全で、安心な放課後の子どもの居場所を設け、地域の方々に参加してもらい、さまざまな体験活動や交流活動の場である。地域では、まず住民へのアンケート調査を行い、地域課題をまとめ、ボランティアの参画をいただくことによって子ども教室を開校することになった。地元に住む人々をはじめ、教員や、スタッフの家族がさまざまな活動を企画し、実行している。子どもたちはテレビやゲームをする時間が多く体験活動や異年齢の子どもたちとの交流が不足する傾向にあるが、何かを一緒に体験することによって、違う学年の子どもたちが交流できるようになっている。

その他に、外国人との交流や異文化理解をする機会となる「JICAの小学校訪問」、そして、子どもの安全確保のために地域住民の力を借りて行われている「丘の子を守る会」などが学社連携の事例としてあげられる。

第3節 公民館活動の変遷からみる学社連携

今回は、前自治協議会長であり、現在も「民俗資料保存委員会」の委員として公民館に関わっている下平隆司氏にお話を伺った。以下はその内容である。

竜丘公民館は1948(昭和23)年に出来たのであり、最初の頃は、生活と密着した生活改善や食生活改善、特にハエの撲滅とネズミの駆除などの地域課題を中心に事業を展開

していた。当時の衛生組合が保健上の指導でやっていただけではなく、実際に地域に根差した形で活動しながら改善を進めていたのは公民館であった。

他に、竜丘公民館では文学サークルがとても活発だった。また、産業振興に関連して、農産物の品評会や家畜の品評会、特に、工業製品の品評会が行われた。また、現在ではあまり行われなくなっているが、当時の竜丘の体育と言えば、野球、卓球、排球であった。

そのように、当時から今まで続いている事業は、運動会、文化祭、成人式、広報である。これらは、公民館の活動としてとても重要な位置を占めており、地域との連携を保つ上でも重要である。特に文化祭では学校との連携の必要性が特に強く、文化祭の会場として小学校を利用し、そこでいろんな展示を小学生にも見てもらい、さらに児童の絵画や書道を展示したりしていた。

1950年代～60年代にかけては、青少年健全育成事業が盛んであり、日曜日などを利用して、地域の人たちが指導者となって、学校の授業にはなかった柔道、剣道など子どもたちに教えていた。現在でも行っているけれども、教える内容は野球、ラグビー、サッカーなどにかわっている。

1960年代後半からは、「早起き野球」、「ママさんバレー」などのスポーツグループ、そして、「母親学級・若妻会」といったようなグループ学習活動が活発になってきた。

しかし、グループ学習活動が盛んにやっていたにもかかわらず、1970年代中頃より、学校は地域をあまり必要としない時代になった。学校は独立した場所であり、地域の人たちとの関わりをあまり持たなくなった。

そういう背景の中で、竜丘公民館は「民俗資料保存委員会」を作り、収集した史料を保存し整理し始めた。特に1960年代後半以降、急激な変化に伴い、使われなくなっている民具がその史料の重要な一部である。集めた膨大な資料をどこに保存するかを考えたところ、子どもたちにも見てもらうために、小学校の空き教室の一部を、民俗資料を保存する場所として使ってきた。ちょうどその時期、学校改築が行われたため、民俗資料を保存する教室を「ふるさと教室」にすることにした。その民俗資料は学校の教材としても使われている。さらに、地域から地域学習の出来る部屋を作りたいという要望がでてきたので、

そういう部屋を一つ設けて、自由画と出土品を展示してきた。

こういう動きを基盤としながら、近年、竜丘地区は小学校との連携の大事さを再認識して、公民館と小学校とが連携する活動が再び盛んになってきた。子どもたちと地域の人たちが一緒に古墳にめぐる「郷土学習」や「ギフチョウ公園づくり」などの活動を始めた。その活動を、公民館主催の学級である「古墳を考える会」が支えてきている。

第4節 古墳を考える会

竜丘公民館では、現在まで主に4つの学級を持っている。「古墳を考える会」はその中で特に活発に行われているものである。1986（昭和61）～1987（昭和62）年に「よりよい地域づくりを目指した素材探し学習会」があった。勉強しているうちに、この地区にあちこちにある古墳を地域住民に知ってもらう必要があると思われるようになった。そのようにして一年かけて学習準備をし、当時の公民館長が委員を集め、1988（昭和63）年に「古墳を考える会」が発足している。さらに準備のための学習を1年間の積み重ねた後、1989（平成元）年に正式発足した。同会は古墳の専門家や飯田市上郷考古博物館の館長を招いて学習会を開いたり、本を読んだりして学習活動を行ってきた。その中で、『古墳マップ』（1988）と『村のみちしるべ』（1990）を作り、全戸配布した。さらに、当時県の文化財保護の技監から指導を受けながら、実際に古墳整備を行った。

これらの学習活動に基づき、『村のみちしるべ』などの説明に従った「ふるさと親子ふれあいハイキング」や、学校での古墳についての共同学習を行ってきた。2001（平成13）年、仕掛け人となる元公民館長を中心としながら、小学校教員5人の協力を得て、子どもたちも一緒に古墳を、1年間かけて調べ『丘のみちしるべ』を作成した。そうすることで、子どもも先生も古墳の学習をするようになった。現在では、古墳の裾に花壇を作って花を植えたりする市民農園の他、小学校のすぐ前で子どもたちに古代食農園を開設し、古代使われたと思われる作物を作っている。前述した現在行われている「丘のみちしるべ探検」と「埴輪づくり」ができたのも「古墳を考える会」の努力とは切りはなせない関わりを持っている。

第5節 ギフチョウ保護運動

「古墳を考える会」は竜丘公民館が携わっている事業の代表的なものであるとすれば、「ギフチョウ保護運動」は地域団体が公民館と協力して実施している成功事例であると言えよう。そして、地区の学社連携に大きな影響を及ぼす住民運動でもある。

前述したように、竜丘地区には天竜川と財産区有林があり、自然環境に恵まれていて、昔からギフチョウが生息する地域であった。しかし、近年では開発による自然破壊やギフチョウの乱獲によって、ギフチョウの数がだんだん少なくなっている。1988（昭和63）年、飯田市の有志団体として「飯田昆虫友の会」が設立され、ギフチョウの保護活動に発足した。同年、竜丘公民館主催の地区文化祭でギフチョウ保護の訴えを発表し、そういうきっかけで公民館事業との連携を始めた。公民館主催の講座などに飯田昆虫友の会が積極的に協力をした。そして、当時、ゴミの焼却場を地区内に建設することが決まり、ギフチョウが生息している地域の木を伐採してしまった。そこで、飯田昆虫友の会は、できるだけギフチョウに影響しないよう、学校と連携して食草の移植を始め、ギフチョウ公園づくりなどの活動も行ってきた。

第6節 考察と今後の課題

竜丘公民館の事業について、いろんな組織と強く連携していることが印象深かった。学社連携事業だけにおいてみれば、学校、PTA、まちづくり委員会、有志団体、JICA そして壮年団など数多くの組織と積極的に連携してきた。その中で、子どもたちはたくさん大人の大人と出会うことができ、自分の将来やこの社会に対する認識がさまざまな活動に参加することによって、形成されていく。そういう意味では、キャリア教育や多文化共生理解といったようなものがこの大人との接触することのなかから学ぶこともできるだろう。また、大人たちが地域の子どもたちを共に育て、子どものことをより深く知ることによって、少子化に伴うさまざまな課題を緩和し、さらに竜丘だからこそできる子育てや地域教育の積極的な意味づけが期待されている。

文化と自然を重視する竜丘地区は現在の風貌ができたのは、古墳を考える会とギフチョウ保護活動といったような公民館実践が

活発に行われてきたことに大きな要因の1つが見出せる。地域の文化財を保護し、後世に伝承するには、学習活動が不可欠な条件である。有志者の積極的な関与に頼るだけでは活動に限界が生じるし、文化財を保護する意識があくまでも一部の人々にとどまってしまうので、住民の参画と関心が重要である。さらに、これらの学習と実践は、地域の歴史、文化、自然環境についてのものだけではなく、地域全体の在り方を地域住民に問いかける機会でもある。自分たちの地域について学習し、知り始めるきっかけとなっている。また、このような学習を経験することによって、身近な事について問題意識を持ちはじめ、何かを勉強し、研究活動に結びつくこともあるだろう。このような実践活動から、公民館の役割がはっきりと見えている。

最後に、竜丘公民館の「大人の学校」と乳幼児学級及び小学校クラブ活動、放課後子ども教室とは強く連携して動いている様子が見えてくる。高齢者の生き甲斐と地域の子育て力が互いに支え合うような構造となっている。今後の継続的な関心としては、竜丘地区の高齢者にとって公民館あるいは自治組織がどういうふうにイメージされているかについて考察をしたい。そこから、公民館活動に比較的によく参加する高齢者と話すことによって、より立体的な公民館像が見えてくると思う。

(汪 乃佳・佐藤 智子)

第12章 地区公民館（本館）に関するアンケートの分析結果

第1節 調査の目的と実施過程

本章では、2010（平成22）年7月に飯田市民館によって実施された「飯田市の地区公民館（本館）に関するアンケート」についての集計結果を示す。本調査は、飯田市民館が実施したもので、東京大学牧野研究室が、調査の設計、集計、分析に協力を行った。

同調査の目的は、「公民館が新しい自治の仕組みの中で果たしてきていること、果たすべき役割を検証し、今年度（筆者注：2010年度）末までに、これからの公民館の方向性をまとめ」るために、「実際に活動をされている公民館役員の皆さんの声をお聞きして公民館の役割検証に活かす」ことであると説明

されている。

設問項目は、以下のようなものである（詳細は、章末の資料を参照）。回答者の属性については、役職（専門委員会の委員か分館役員か）、経験年数、性別、年齢、居住年数が尋ねられている。これらの項目はクロス集計で用いられる。次に、問1では、地区の地域課題について、人間関係、自治活動、少子化、高齢化、住民のグループ、地区への愛着、公民館活動の7点について、5段階で評価を尋ねている。これは地域課題を把握し、公民館活動との関連を見るための設問である。問2は、公民館活動についての印象に関する質問で、各地区での活発度、役員としてのやりがい、活動のしやすさの3点を尋ねている。なお問2の最後には、活動のしやすさをどのような点に感じているかについての自由記述の欄が設けられている。問3では、地区公民館（本館）の果たしている役割と、公民館主事とその役割を果たすに当たって役立ってきたか、今後も職員の配置が必要かについて尋ねている。公民館活動の役割と、今後の方向性を探るための設問である。問4では公民館の印象、問5で公民館に対する意見や提言についての自由記述を求めている。

【調査実施状況】

- 調査の対象者（1,120名）
全地区公民館の公民館役員
 - ・専門委員会委員（委員長、副委員長、委員）
 - ・分館役員（分館長、副分館長、分館主事）
- 調査期間 2010（平成22）年7月6～31日
※実施期間は各地区公民館で設定。
- 提出先 各地区公民館（公民館主事）

【回収状況】

- 回収数（母集団に対する比率） 690
(61.6%)
- 有効回答数（回収数に対する比率） 690
(100.0%)

調査の概要は上記の通りである。調査対象者は、全地区の公民館の役員1,120名である。調査票は、飯田市民館によって作成され、調査票の配布・回収・入力には各地区公民館の公民館主事によって行われた。全体の回収率は約6割で、各地区の配布・回収状況は、〈図表22〉の通りである。多くの地区では、50

～60%代の回収率となっている。以下、2節で、単純集計の結果を、3節で重点的に分析した項目についての集計結果を示し、それぞれについて考察を行う。4節で、今後の研究課題を示す。

〈図表 22〉 地区ごとの調査票回収状況

地区名	配布数	回収率	回収率	有効回答数
橋北	42	28	66.7%	28
橋南	21	11	52.4%	11
羽場	46	28	60.9%	28
丸山	43	30	69.8%	30
東野	62	25	40.3%	25
座光寺	66	41	62.1%	41
松尾	95	52	54.7%	52
下久堅	74	39	52.7%	39
上久堅	49	36	73.5%	36
千代	61	42	68.9%	42
龍江	40	37	92.5%	37
竜丘	72	40	55.6%	40
川路	47	34	72.3%	34
三穂	53	17	32.1%	17
山本	60	49	81.7%	49
伊賀良	87	51	58.6%	51
鼎	60	35	58.3%	35
上郷	86	63	73.3%	63
上村	20	12	60.0%	12
南信濃	36	20	55.6%	20
合計	1120	690	61.6%	690

第2節 「飯田市公民館調査」の単純集計の結果

まず、最初に回答者の属性について確認する。回答者の役職〈図表 23〉については、3/4 が専門委員会の委員、残りが分館委員となっている。なお、両者を兼ねるものが5名いたため、クロス集計の際には重複してカウントされている。

〈図表 23〉 回答者の役職

	n		内訳	n		%
	n	%		n	%	
専門委員会の委員	521	75.0%	文化	160	23.0%	
			体育	174	25.0%	
			広報	105	15.1%	
			育成	61	8.8%	
			その他	20	2.9%	
分館委員	170	24.5%	不明	1	0.1%	
			分館長	73	10.5%	
			副分館長	27	3.9%	
			分館主事	66	9.5%	
			不明	4	0.6%	
無回答			4	0.6%		
合計			695	100.0%		

※専門委員と分館委員で5名重複あり。

回答者の経験年数〈図表 24〉は、0～2年が55%、3～4年が16%と比較的経験年数が短い。性別〈図表 25〉については、男性が約3/4である。年齢〈図表 26〉は、20代、30代は少なく、40代、50代がそれぞれ1/3

ずつとなっている。居住年数〈図表 27〉は、30年未満が約2割、40年以上が約6割と地域に長く居住している人々が多くを占める。

〈図表 24〉 回答者の委員経験年数

	n	%
0～2年	372	53.9
3～4年	113	16.4
5～6年	63	9.1
6年以上	124	18.0
無回答	18	2.6
合計	690	100

〈図表 25〉 回答者の性別

	n	%
男性	521	75.5
女性	157	22.8
無回答	12	1.7
合計	690	100.0

〈図表 26〉 回答者の年齢構成

	n	%
20代	10	1.4
30代	86	12.5
40代	228	33.0
50代	224	32.5
60代以上	135	19.6
無回答	7	1.0
合計	690	100.0

〈図表 27〉 回答者の地区居住年数

	n	%
5年未満	18	2.6
10年未満	41	5.9
20年未満	103	14.9
30年未満	130	18.8
30年以上	393	57.0
無回答	5	0.7
合計	690	100.0

次に、各項目の単純集計を見て行く。問1は地区の地域課題について5段階で尋ねたもので、〈図表 28〉のような回答状況になっていた。「非常にそう思う」「まあそう思う」の合計の割合を見ると、「高齢化の進展」や「子どもの減少」は、8割を超える回答者が肯定しており、少子高齢化への課題認識が見られる。「愛着が持てる地区」については約半数が肯定している。「つながりの希薄化」「自治活動の活性化」「公民館活動の活性化」については約4割の人々が肯定の回答を示している。「新しいグループ・団体の増加」については否定的な回答の割合が高い。また

〈図表 28〉 地域課題への意識

		非常にそう思う	まあそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	全くそう思わない	無回答	合計
つながりの希薄化	n	41	229	146	230	39	5	690
	%	5.9	33.2	21.2	33.3	5.7	0.7	100.0
自治活動の活発化	n	30	219	287	126	23	5	690
	%	4.3	31.7	41.6	18.3	3.3	0.7	100.0
高齢化の進展	n	382	251	28	20	7	2	690
	%	55.4	36.4	4.1	2.9	1.0	0.3	100.0
子どもの減少	n	355	217	67	41	9	1	690
	%	51.4	31.4	9.7	5.9	1.3	0.1	100.0
新しいグループ・団体の増加	n	18	111	235	251	71	4	690
	%	2.6	16.1	34.1	36.4	10.3	0.6	100.0
愛着が持てる地区	n	36	300	253	84	15	2	690
	%	5.2	43.5	36.7	12.2	2.2	0.3	100.0
公民館活動の活発化	n	45	224	286	122	12	1	690
	%	6.5	32.5	41.4	17.7	1.7	0.1	100.0

めれば、地区では少子高齢化やつながりの希薄化といった認識が共有されている中で、一定程度の割合の人々が、自治活動や公民館活動の活動に期待を持っている状況にあると言える。

次に公民館活動に対する印象について尋ねた問2の回答状況を見よう。公民館活動の活発度〈図表29〉については、「非常にそう思う」「まあそう思う」が合わせて6割を超えている。否定の回答は1割程度であり公民館活動は活発であるという認識の方が勝っている。

公民館役員のやりがいについては、約6割の役員がやりがいを感じている〈図表30〉。ただし「どちらでもない」層も3割おり、この層がどのような意見を有しているか、自由記述の分析を行う必要がある。「活動のしやすさ」〈図表31〉については、活動しやすいと答えた人が約7割で、活動に当たっての支障はそれほど大きくはないようである。

〈図表 29〉 公民館活動の活発度

	n	%
非常にそう思う	111	16.1
まあそう思う	339	49.1
どちらでもない	175	25.4
あまりそう思わない	59	8.6
全くそう思わない	5	0.7
無回答	1	0.1
合計	690	100.0

〈図表 30〉 公民館役員のやりがい

	n	%
非常にそう思う	62	9.0
まあそう思う	340	49.3
どちらでもない	207	30.0
あまりそう思わない	67	9.7
全くそう思わない	12	1.7
無回答	2	0.3
合計	690	100.0

〈図表 31〉 公民館役員の活動のしやすさ

	n	%
非常に活動しやすい	41	5.9
活動しやすい	446	64.6
活動しにくい	144	20.9
非常に活動しにくい	24	3.5
無回答	35	5.1
合計	690	100.0

問3の地区公民館の果たしている役割〈図表32〉については、「非常に果たしている」「ある程度果たしている」の合計を見ると、8割を超えるのが「スポーツ・レクリエーション」、約7割近くの値を示すのが「交流できる機会づくり」「だれもが気軽に利用し活動できる場」「地域の情報発信」「地域の伝統や文化の継承」、55%が「子どもの愛着心を育む」、約5割が回答したのが「差別の無い地域づくり」「地域の課題解決」であった。どの項目でも役割を果たしていないとする回答者は少なく、公民館の役割については、全地区で一定以上の評価がなされていると言える。一方で、「どちらでもない」という回答が3割を超える項目も存在している（「子どもの愛着心を育む」「差別の無い地域づくり」「地域の課題解決」）。それぞれの地

〈図表 32〉 地区公民館の果たしている役割

		非常に果たしている	ある程度果たしている	どちらでもない	あまり果たしていない	全く果たしていない	無回答	合計
誰もが利用し活動できる	n	80	413	131	56	4	6	690
	%	11.6	59.9	19.0	8.1	0.6	0.9	100.0
交流できる機会づくり	n	67	453	120	42	3	5	690
	%	9.7	65.7	17.4	6.1	0.4	0.7	100.0
地域の伝統・文化の継承	n	76	395	162	47	5	5	690
	%	11.0	57.2	23.5	6.8	0.7	0.7	100.0
学習を通じた地域の課題解決	n	39	299	252	84	6	10	690
	%	5.7	43.3	36.5	12.2	0.9	1.4	100.0
差別のない地域づくり	n	37	308	261	65	7	12	690
	%	5.4	44.6	37.8	9.4	1.0	1.7	100.0
スポーツ・レクリエーション	n	121	459	80	22	3	5	690
	%	17.5	66.5	11.6	3.2	0.4	0.7	100.0
子どもの愛着心を育む	n	49	338	222	67	5	9	690
	%	7.1	49.0	32.2	9.7	0.7	1.3	100.0
地域の情報発信	n	84	414	148	37	2	5	690
	%	12.2	60.0	21.4	5.4	0.3	0.7	100.0

区の公民館が、どのような役割を意識化し活動を行ってきたのか、それがきちんと住民に評価されているかといった観点から、この結果を見直す必要があると考えられる。

上記のような役割を公民館が果たすに当たって、主事がどの程度役立ってきたかを尋ねた問3-2では〈図表 33〉、「とても思う」「ある程度思う」の合計は9割を超えており、概して主事の働きは肯定的に捉えられている。また、これを受けて、今後の職員配置の必要性について尋ねたところ〈図表 34〉、現状どおりに専任の主事の配置を望む回答が約9割となっていた。地域づくり担当の職員の配置を望む声も少ないことから、「公民館主事」という役職に、現在でも一定の意義が認められていると見ることができる。

〈図表 33〉 公民館主事の貢献度

	n	%
とても思う	414	60.0
ある程度思う	223	32.3
どちらでもない	31	4.5
あまり思わない	3	0.4
全く思わない	3	0.4
無回答	16	2.3
合計	690	100.0

〈図表 34〉 今後の職員配置の必要性

	n	%
現状どおり	604	87.5
地域づくり担当職員の配置	59	8.6
職員配置は不要	1	0.1
無回答	26	3.8
合計	690	100.0

第3節 地域課題と公民館の役割の集計結果

ここでは、問1の地域課題、問3-1の公民館の果たしている役割について、各項目の点数を合算し、地区別、属性別の平均値を算出した結果について述べる。これらの設問は、全体として各地区での地域課題や、公民館の役割を明らかにするために設けられている。

1 地域課題についての分析

まず、問1について、設問の7項目それぞれの項目の平均値と、各項目の合計点の平均値を示したものが、〈図表 35〉～〈図表 40〉である。なお、集計に際して「自治活動の活発化」「新しいグループ・団体の増加」「愛着が持てる地区」「公民館活動の活発化」については、「1非常にそう思う」を5に、「5全くそう思わない」を1に、と順序を反転している。このことで数値が高いほど、地区に対する肯定的な見方が強いことになる。なお、7項目の合計点を算出する際、変数間の一貫性を示す信頼性係数(Cronbachの α)を求めたところ、0.569となっていた。この値は、通常0.7以上であることが基準となっており、それを下回っているため、信頼性はやや弱い。参考程度に見て頂きたい。

〈図表 35〉は地区別の平均値である。各項目上位5地区には下線を付し、下位5地区はイタリックで示した。これを見ると、各地区で地域課題のあり方は異なる。地区別に見ると、自治活動や公民館活動が活発で地区への愛着も高いとされるのが、橋北、橋南、羽場、座光寺、竜丘といった地区である。また、

〈図表 35〉「地域課題」についての地区別平均値

地区名	つながり	自治活動 (反転)	高齢化進展	子ども減少	住民団体の増 加(反転)	愛着持てる地 域(反転)	公民館活動 (反転)	合計点
橋北	3.00	3.32	1.29	1.36	2.57	3.61	3.36	18.50
橋南	3.00	3.55	1.27	1.18	2.64	3.55	3.82	19.00
羽場	2.96	3.07	1.89	1.96	2.54	3.64	3.46	19.54
丸山	2.73	3.27	1.37	1.73	2.63	3.37	3.17	18.27
東野	3.32	3.08	1.48	1.68	2.36	3.80	3.40	19.12
座光寺	3.07	4.00	1.65	1.88	3.24	3.88	4.07	21.85
松尾	3.10	3.02	1.75	2.25	2.52	3.25	3.31	19.19
下久堅	3.18	2.85	1.46	1.62	2.44	3.33	2.82	17.74
上久堅	3.03	3.11	1.31	1.28	2.61	3.03	3.19	17.57
千代	3.19	3.02	1.26	1.19	2.31	3.14	2.71	16.71
龍江	3.19	3.32	1.43	1.30	2.78	3.14	3.38	18.54
竜丘	2.95	3.15	1.95	2.40	2.92	3.55	3.43	20.33
川路	2.97	3.30	1.50	1.62	2.71	3.15	3.00	18.28
三穂	3.06	3.00	1.71	1.47	2.65	3.47	3.53	18.88
山本	2.73	3.08	1.67	1.65	2.81	3.31	3.27	18.49
伊賀良	2.61	3.18	1.84	2.47	2.69	3.29	3.27	19.40
鼎	2.89	2.97	1.94	2.00	2.47	3.46	3.29	19.03
上郷	2.87	2.90	1.62	1.79	2.52	3.52	3.13	18.40
上村	3.75	3.42	1.00	1.00	3.08	3.08	3.17	18.50
南信濃	3.26	3.00	1.05	1.10	2.45	2.84	2.30	16.11
合計	3.00	3.16	1.57	1.74	2.64	3.38	3.24	18.74

〈図表 36〉「地域課題」についての役職別平均値

役職	つながり	自治活動 (反転)	高齢化進展	子ども減少	住民団体の増 加(反転)	愛着持てる地 域(反転)	公民館活動 (反転)	合計点
専門委員会の委員	3.00	3.20	1.59	1.76	2.68	3.42	3.32	18.97
分館委員	2.97	3.03	1.54	1.68	2.52	3.25	3.04	18.03
合計	3.00	3.16	1.58	1.74	2.64	3.38	3.25	18.75

〈図表 37〉「地域課題」についての性別平均値

性別	つながり	自治活動 (反転)	高齢化進展	子ども減少	住民団体の増 加(反転)	愛着持てる地 域(反転)	公民館活動 (反転)	合計点
男性	3.02	3.12	1.57	1.73	2.61	3.36	3.21	18.64
女性	2.89	3.30	1.61	1.80	2.79	3.48	3.38	19.28
合計	2.99	3.16	1.58	1.74	2.65	3.39	3.25	18.79

〈図表 38〉「地域課題」についての経験年数別平均値

経験年数	つながり	自治活動 (反転)	高齢化進展	子ども減少	住民団体の増 加(反転)	愛着持てる地 域(反転)	公民館活動 (反転)	合計点
0～2年	2.98	3.15	1.59	1.76	2.61	3.37	3.22	18.69
3～4年	2.96	3.22	1.46	1.69	2.81	3.35	3.30	18.79
5～6年	3.21	3.08	1.63	1.83	2.67	3.51	3.25	19.13
6年以上	2.97	3.19	1.62	1.72	2.64	3.43	3.31	18.94
合計	3.00	3.16	1.58	1.75	2.66	3.39	3.25	18.79

松尾、竜丘、伊賀良、鼎といった地区は、少子高齢化の課題認識が低く、合計点にもその意識が反映される形となっている。一方、実際に高齢化が進む地区、例えば、橋北、橋南、千代、上村、南信濃といった地区は少子高齢化が課題として認識されている。

次に〈図表 36〉では、役職別の平均値をみている。全ての項目で専門委員会の委員の方が分館委員より地域について肯定的な印象を有している。〈図表 37〉は性別平均値を見たものである。「つながりの希薄化」を除き、女性の方が男性よりも地域について肯定

的な印象を抱いていると言える。〈図表 38〉は経験年数別に平均値を見たものである。この結果からは、経験年数の長さや地域についての印象の関連を見出すことは難しい。〈図表 39〉は同じく年代別に平均値を見たものである。一貫した傾向を見出すことは難しいが、幾つかの特徴がある。(1) 20代の役員は自治会活動や公民館活動への評価が低い。(2) 高齢化の進展については、年代が上がるほど、課題意識が下がる。(3) 全体として、30～40代が地域に対して肯定的な印象を抱いている。最後に〈図表 40〉は、居住年数

〈図表 39〉「地域課題」についての年代別平均値

年代	つながり	自治活動 (反転)	高齢化進展	子ども減少	住民団体の増 加(反転)	愛着持てる地 域(反転)	公民館活動 (反転)	合計点
20代	3.20	2.80	1.70	1.50	3.00	3.40	3.00	18.60
30代	3.05	3.28	1.63	1.81	2.65	3.29	3.35	19.04
40代	3.05	3.19	1.68	1.80	2.62	3.43	3.25	19.02
50代	3.00	3.09	1.49	1.74	2.69	3.36	3.28	18.66
60代以上	2.85	3.18	1.52	1.65	2.60	3.36	3.14	18.34
合計	3.00	3.16	1.58	1.75	2.65	3.38	3.25	18.76

〈図表 40〉「地域課題」についての居住年数別平均値

居住年数	つながり	自治活動 (反転)	高齢化進展	子ども減少	住民団体の増 加(反転)	愛着持てる地 域(反転)	公民館活動 (反転)	合計点
5年未満	3.00	3.28	1.94	1.94	2.89	3.72	3.22	20.00
10年未満	3.08	3.15	1.66	2.00	2.83	3.44	3.41	19.63
20年未満	3.01	3.07	1.71	1.91	2.50	3.37	3.27	18.89
30年未満	3.09	3.21	1.53	1.78	2.72	3.38	3.36	19.10
30年以上	2.95	3.15	1.52	1.65	2.63	3.35	3.18	18.43
合計	2.99	3.15	1.57	1.74	2.65	3.37	3.24	18.74

〈図表 41〉「公民館の役割」についての地区別平均値

地区名	気軽に利用できる場	交流できる機会 づくり	伝統・文化の継 承	地域の課題解 決	差別のない地域 づくり	スポーツ・レクリ エーション	子どもの愛着心 を育む	情報発信	合計点
橋北	3.93	4.07	3.93	3.64	3.71	4.11	3.71	3.96	31.07
橋南	3.90	3.64	4.27	3.64	3.36	3.91	3.82	3.91	30.20
羽場	4.11	4.00	3.93	3.57	3.68	4.04	3.71	4.11	31.14
丸山	3.97	3.93	4.00	3.72	3.53	4.03	3.57	3.97	30.59
東野	3.92	4.00	3.75	3.67	3.58	4.13	3.54	3.88	30.46
座光寺	3.85	3.98	4.05	3.76	3.56	4.20	3.95	3.83	31.17
松尾	3.88	3.79	3.48	3.25	3.37	4.08	3.35	3.65	28.85
下久堅	3.69	3.79	3.82	3.28	3.28	4.03	3.51	3.59	29.00
上久堅	3.81	3.83	3.75	3.47	3.44	3.94	3.42	3.72	29.39
千代	3.62	3.69	3.67	3.21	3.38	3.98	3.40	3.48	28.43
龍江	3.57	3.70	3.84	3.24	3.24	3.86	3.65	3.81	28.86
竜丘	3.77	3.82	3.82	3.73	3.47	3.87	3.79	3.77	30.22
川路	3.68	3.56	3.65	3.21	3.41	3.91	3.29	3.85	28.56
三穂	4.00	4.00	3.82	3.71	3.41	3.88	3.81	4.00	30.88
山本	3.61	3.57	3.52	3.32	3.46	3.86	3.27	3.42	27.96
伊賀良	3.63	3.71	3.55	3.31	3.37	3.92	3.39	3.88	28.76
鼎	3.74	3.79	3.54	3.53	3.42	3.88	3.50	3.86	29.00
上郷	3.65	3.79	3.48	3.24	3.43	4.13	3.56	3.97	29.24
上村	3.27	3.64	4.18	3.30	3.70	4.00	3.73	3.82	29.70
南信濃	3.50	3.50	3.40	3.00	3.50	3.65	3.10	3.80	27.45
合計	3.74	3.79	3.72	3.41	3.45	3.98	3.53	3.79	29.39

別平均値を示したものである。居住年数が長くなるほど地域に対する肯定感とは下がる傾向にある。これは少子・高齢化や団体・グループの増加、愛着が持てる地区といった項目の平均値が下がっていることに起因する。これについては、長く地域に住めば住むほど、地域課題を意識するようになるのか、見方が保守化する傾向にあるのか、幾つかの要因が考えられる。

2 公民館の果たしている役割についての分析

次に、問3の「公民館の果たしている役割」について¹¹⁸、設問の8項目それぞれの項目の

平均値と、各項目の合計点の平均値を示したものが、〈図表 41〉～〈図表 46〉である。集計に際して全ての項目について、「1 非常に思う」を5に、「5 全くそう思わない」を1に順序を反転した。この処理により、数値が高いほど、公民館の役割について積極的な評価をしていることとなる。なお、8項目の合計点を算出する際、変数間の一貫性を示す信頼性係数(Cronbachの α)を求めたところ、0.923と非常に高い値を示した。それぞれの地区で、各役割に関わらず公民館への評

館に対する意識を問う項目であり、実際の公民館活動の充実度を示す項目ではない。役員の公民館活動に対する理想が高ければ、活動への評価が厳しくなることもあり得る。その逆もまた然りである。

¹¹⁸ これは、各地区の公民館役員の、地区の公民

〈図表 42〉「公民館の役割」についての役職別平均値

役職	気軽に利用できる場	交流できる機会づくり	伝統・文化の継承	地域の課題解決	差別のない地域づくり	スポーツ・レクリエーション	子どもの愛着心を育む	情報発信	合計点
専門委員会の委員	3.77	3.81	3.75	3.47	3.46	4.00	3.59	3.82	29.66
分館委員	3.67	3.71	3.61	3.24	3.39	3.92	3.35	3.68	28.60
合計	3.75	3.79	3.71	3.42	3.45	3.98	3.53	3.79	29.40

〈図表 43〉「公民館の役割」についての性別平均値

性別	気軽に利用できる場	交流できる機会づくり	伝統・文化の継承	地域の課題解決	差別のない地域づくり	スポーツ・レクリエーション	子どもの愛着心を育む	情報発信	合計点
男性	3.75	3.81	3.70	3.43	3.45	3.98	3.52	3.78	29.40
女性	3.76	3.74	3.79	3.40	3.47	4.01	3.56	3.86	29.62
合計	3.75	3.79	3.72	3.42	3.45	3.99	3.53	3.80	29.45

〈図表 44〉「公民館の役割」についての経験年数別平均値

経験年数	気軽に利用できる場	交流できる機会づくり	伝統・文化の継承	地域の課題解決	差別のない地域づくり	スポーツ・レクリエーション	子どもの愛着心を育む	情報発信	合計点
0～2年	3.65	3.72	3.67	3.35	3.42	3.92	3.48	3.75	28.95
3～4年	3.88	3.85	3.76	3.42	3.47	4.08	3.58	3.88	29.94
5～6年	3.87	3.79	3.71	3.51	3.48	4.16	3.60	3.85	29.87
6年以上	3.87	3.93	3.89	3.60	3.52	4.04	3.65	3.82	30.31
合計	3.75	3.79	3.73	3.43	3.45	3.99	3.54	3.79	29.46

〈図表 45〉「公民館の役割」についての年代別平均値

年代	気軽に利用できる場	交流できる機会づくり	伝統・文化の継承	地域の課題解決	差別のない地域づくり	スポーツ・レクリエーション	子どもの愛着心を育む	情報発信	合計点
20代	3.60	3.70	3.70	3.60	3.40	4.00	3.70	3.80	29.50
30代	3.68	3.85	3.66	3.55	3.53	4.02	3.60	3.71	29.51
40代	3.70	3.74	3.76	3.48	3.45	4.00	3.58	3.78	29.52
50代	3.79	3.86	3.72	3.38	3.42	4.00	3.51	3.83	29.55
60代以上	3.77	3.71	3.66	3.23	3.42	3.89	3.39	3.78	28.78
合計	3.74	3.79	3.71	3.41	3.44	3.98	3.52	3.79	29.38

〈図表 46〉「公民館の役割」についての居住年数別平均値

居住年数	気軽に利用できる場	交流できる機会づくり	伝統・文化の継承	地域の課題解決	差別のない地域づくり	スポーツ・レクリエーション	子どもの愛着心を育む	情報発信	合計点
5年未満	3.56	3.67	3.61	3.33	3.33	3.78	3.61	3.67	28.56
10年未満	3.61	3.68	3.73	3.39	3.32	4.00	3.59	3.73	29.05
20年未満	3.69	3.79	3.70	3.44	3.34	4.01	3.55	3.74	29.32
30年未満	3.81	3.83	3.69	3.30	3.52	3.95	3.57	3.78	29.50
30年以上	3.76	3.78	3.73	3.45	3.46	3.99	3.49	3.81	29.41
合計	3.74	3.79	3.71	3.41	3.44	3.98	3.52	3.78	29.37

備は安定していると言える。

〈図表 41〉は地区別の値を示したものである。各項目上位5地区には下線を付し、下位5地区はイタリックで示した。各項目の平均値は3点～4点の間にあり、公民館活動への評価は全体的に肯定的であると言える。特に、スポーツ・レクリエーション、情報発信、気軽に利用できる場、交流できる機会づくりといった役割への評価が高い。一方で、地域の課題解決といった点での役割には課題があるようである。

地区別に見ると、橋北、羽場、丸山、東野、座光寺、三穂といった地区で、公民館の役割が高く評価されていることが分かる。一方、松尾、千代、山本、南信濃といった地区での評価は低くなっている。橋南や竜丘、上郷、

上村のように、機能別に評価が異なる公民館もあるものの、全体としては二極分化の傾向が示されている。

次に、属性別の平均値を見る。〈図表 42〉は、役職別平均値であるが、専門委員会の委員の方が分館委員よりも総じて評価が高い。この設問が、公民館（本館）への評価であることに注意されたい。要因として、分館委員の方が本館の活動への評価が厳しくなる、もしくは現在専門委員会の委員として関わることによって活動への評価が高まるといったことが考えられる。

〈図表 43〉は性別の平均値である。男女でそれほど大きな差はないが、女性の方がわずかに高い。経験年数別〈図表 44〉では、年数が長ければ長いほど、公民館の役割を評

価する傾向が見られる。長く公民館活動に関わるほど、公民館の活動について理解が高まり、果たしている役割についての評価も積極的になるのだろう。

〈図表 45〉は年代別平均値である。これを見ると年代別に傾向がやや異なる。「気軽に利用できる場」という点については、若年層よりも高齢者層の方の評価が高い。一方、「地域の課題解決」及び、「子どもの愛着心を育む」については、若年層の方の評価が高くなっている。これは各年代で公民館のイメージが異なることを示しているのではないだろうか。例えば 60 代以上は「地域の課題解決」の場というイメージを有しているため、現状の公民館のあり方にやや批判的であるのかもしれない。一方、若年層、特に子育てに関わる世代は、子どもとの関わりから公民館活動を評価しているのではないか。全体として、60 代以上の評価がやや低いものとなっている。

最後に居住年数別に見たものが〈図表 46〉である。全体として、居住年数が長くなるほど、評価が高まる傾向にある。このことについては、居住年数が長くなるほど、公民館の利用経験や役員経験の可能性が高まり、そのことで公民館の果たしている多面的な役割への認知と評価が形成されていくのではないかと、という理由づけを行うことができる。

第 4 節 今後の研究課題

ここまで、単純集計の結果と、地域課題・公民館の役割についての分析を紹介してきた。今後さらに詳細な分析を進める必要があるが、ここで今後の公民館のあり方を考えるための課題を 2 点挙げる。

第 1 に、今回の調査では、公民館及び公民館主事の役割について肯定的な評価が見られたが、これが飯田市の市民意識をどの程度代表するものなのか検討を行う必要がある。今回の調査対象者は、公民館（本館）の委員や、分館役員など、（課題も含めて）公民館の活動に理解を持つ人々である。しかし、市民の中には公民館の活動に参加しない人々、活動内容を知らない人々も多く存在する。従来、公民館活動を支えてきた層だけでなく、それ以外の層に対してどのように働きかけ、活動へと参加を促すのか、その方略を考えるためにも、今回の調査結果と市民意識調査とを比較した分析が必要である。

第 2 に、本館と分館の活動の差異の考察である。今回の調査結果からも、本館の委員と分館の役員との間で、本館の活動に対する意識に差があることがうかがえた（例えば、〈図表 42〉など）。現地調査の中でも、「分館活動が公民館の基本である」という声を何度もうかがったところである。分館役員の意識構造を（本館の委員と比較しながら）分析していくことで、各地区の中での本館と分館の関係や、本館の活動が持つ課題が明らかになってくるのではないだろうか。これらについては、今後の課題としたい。

最後に、今回の調査結果を各地区でフィードバックすることで、公民館活動のあり方を見直す契機とすることを提言したい。問 3 の地区公民館の果たしている役割を見ると「スポーツ・レクリエーション」「交流できる機会づくり」「だれもが気軽に利用し活動できる場」など、公民館の交流機能が明らかになる一方で、「地域の課題解決」という公民館が力を入れてきたとされる部分についての評価は限定的なものに留まった。また問 2 や、問 4 や問 5 の自由記述の中で、様々な課題への言及も見られるところである。今回の調査結果を、公民館と地域住民が対話を行うためのツールとして用い、今後の公民館のあり方を検討していくことが必要である。今後の共同学習の中でこの点も深めていくこととしたい。

（荻野 亮吾）

資料 飯田市の地区公民館（本館）に関するアンケート調査用紙

☆ 該当する数字へ ○ をしてください。

・地区名	()
※注:「地区」とは「松尾」「上郷」等の単位をいう。以下同様。	
・公民館の役職	1 専門委員会の委員 (含正副委員長)
	①文化 ②体育 ③広報 (新聞) ④育成 ⑤その他
	2 分館役員
	①分館長 ②副分館長 ③分館主事
・経験年数 (通算)	1 0年～2年 2 3年～4年 3 5年～6年 4 6年以上
・性別	1 男性 2 女性
・年齢	1 20代 2 30代 3 40代 4 50代 5 60代以上
・該当地区の居住年数 (通算)	
	1 5年未満 2 10年未満 3 20年未満 4 30年未満 5 30年以上

問1 あなたの住まいの地区に関する印象について、5年前と比べてお答えください。

	非常に そう思う	まあ そう思う	どちら でもない	あまり そう思 わない	全く そう 思わ ない
1 住む人たちのつながり (人間関係) が希薄になってきたとお感じですか	1	2	3	4	5
2 自治活動 (まちづくり委員会等の活動) が活発になってきたと感じますか	1	2	3	4	5
3 高齢化が進んできたとお感じですか	1	2	3	4	5
4 子どもが減ってきたとお感じですか	1	2	3	4	5
5 住民の新しいグループや団体が増えてきたとお感じですか	1	2	3	4	5
6 住んでいることに愛着がもてる地区になってきたと思いますか	1	2	3	4	5
7 公民館活動は盛んになってきたとお感じですか	1	2	3	4	5

問2 現在、あなたの地区の公民館活動は盛んだとお感じですか

- 1 非常にそう思う 2 まあそう思う 3 どちらともいえない

- 4 あまりそう思わない 5 全くそう思わない

2-② あなたは、公民館の役員（委員）としてやりがいをお感じですか

- 1 非常に感じている 2 まあ感じている 3 どちらともいえない
4 あまり感じていない 5 全く感じていない

2-③ 現在、あなたが担う公民館の役員としての活動に対する印象をお答えください

- 1 非常に活動しやすい 2 活動しやすい
3 活動しにくい 4 非常に活動しにくい

それはどのような点に感じていますか（自由記述）

問3 地区公民館（本館）は、次の点からその役割を果たせていると思いますか

果たしている役割	非常に果たしている	ある程度果たしている	どちらでもない	あまり果たしていない	全く果たしていない
1 だれもが気軽に利用し活動できる場	1	2	3	4	5
2 みんなが交流できる機会づくり	1	2	3	4	5
3 地域の伝統や文化を今に活かし継承する	1	2	3	4	5
4 学習を通じて地域の課題解決に取り組む	1	2	3	4	5
5 多様な価値観を認め差別の無い地域づくり	1	2	3	4	5
6 スポーツ・レクリエーションの機会づくり	1	2	3	4	5
7 子どもが地域を学び愛着心を育む	1	2	3	4	5
8 地域の情報発信（広報）	1	2	3	4	5

3-② 各地区へ1名配置してきている「公民館主事」（市職員）は、問3の役割を公民館が果たすのに役立ってきたと思いますか

- 1 とても思う 2 ある程度思う 3 どちらともいえない
4 あまり思わない 5 全く思わない

3-③ 今後の公民館への市職員の配置について伺います

- 1 現状どおり専任の「公民館主事」の配置は必要だと思う
2 「公民館主事」でなくても地域づくりを担当する職員の配置があればよい
3 市職員の配置は不要だと思う

問4 あなたにとって「公民館」とはどんなところでしょうか。一言でお願いします（自由記述）

問5 地区公民館（本館）に対する期待やご意見・ご提言があればお願いします（自由記述）